

# 「今、われわれの食べ物におきていること」

## ～SDGsシリーズ 農業(食)から見る我々の近未来～

第6回政策デザインシリーズでは、SDGsシリーズ第2弾として、“農業”をテーマに開催します。2022年11月に開催されたCOP27において、「損失と損害」の基金設立が合意されたとのニュースが飛び込んできました。一方で気候変動をもたらす温室効果ガス排出量削減の更なる数値目標設定等、根本的な問題は先送りになったままです。日々深刻化する地球環境の問題と人類が求める豊かさへの欲望は、どこでバランスを取ることが出来るのでしょうか。複雑に絡んだ問題を解くのは容易ではありません。今回は、農学とICT分野の第一人者である東京大学大学院農学生命科学研究科・二宮 正士 先生から、農業(食)をテーマに幅広く問題提議を頂きます。その上で、参加者を交えて意見交換を行いたいと思います。今回はリアル開催を致します。皆様のご参加をお待ちしております。

### 講演者

二宮 正士 氏

東京大学大学院 農学生命科学研究科 特任教授

1983年東京大学農学部助手。その後、1991年農水省農業環境研究所研究室長、同農業研究センター上席研究官、農研機構中央農業研究センター研究部長などを経て、2010年東京大学農学生命科学研究科教授。2017年定年退職と同時に同特任教授および同大名誉教授、現在にいたる。農林水産技術会議委員や国際農業工学会CIGR会長、米サイエンス関連の科学誌の編集長、南京農業大学客員教授なども務めている。



### 講演概要

半世紀前、ローマクラブがMITなどに委託して発表した「成長の限界」は、人口増に追いつけない食料生産がその大きな要因としていました。それから50年、確かに80億に達した地球人口の1割に当たる8億人が飢餓に苦しみ、ウクライナ戦争による食糧危機や食料品の高騰が報道されています。しかし一方で、我が国では相変わらずグルメ話がテレビなどにあふれ、スーパーやデパートには豊かな食品が大量に売られ、おいしく高品質で多様な食がインバウンドも魅了していると盛んに報道されています。どうも、日本では将来にわたる食を心配しているのは多数派では無いようです。

本講演では、20世紀後半、「緑の革命」などを通して食料の大増産に成功した一方、農業がもはやかつてのグリーン産業ではなくなってしまったこととお話します。われわれに豊かな食を供給する一方、地球の安定的な窒素循環を壊し、温暖化ガスの大排出源であるなど、カーボンニュートラルやSDGs達成の大きな足かせになっています。また、食料不足が単に人口増によってのみもたらされるものではなく、われわれが何を食べるのかに大きく依存していること、単に熱量を摂取するだけなら100億人でも十分にこの地球は養える可能性があることも話し、食料生産の持続性と生産性の双方を担保しながらローマクラブの警鐘に答える道を探りたいと思います。

**日時** 2023年2月1日(水) 17:00～  
(18:30頃から懇話会を予定)

**対象** 京都大学教員・学生、京都大学デザインイノベーションコンソーシアム会員、一部招待者

**定員** 40名程度

**参加費** 無料

**申込** 要事前登録。下記よりお申込みください。  
<https://pro.form-mailer.jp/fms/92b94048272645>

**締切** 2023年1月20日(金)

**場所** リアル／京都リサーチパーク4号館地下1階 バンケットホール  
オンライン／Zoom

**問合せ** 京都大学デザインイノベーションコンソーシアム 事務局  
公益財団法人京都高度技術研究所 内 担当:野木  
E-mail: info@designinnovation.jp TEL:075-323-7073

